

# レンズを通して

連載「六月」

写真・文 高円宮妃久子殿下



アカシヨウベン  
27・5cm カワセミ科  
種としてはインド北東部、マレー半島、大スンダ列島に留鳥として分布。ブータン、中国東北部、朝鮮半島や日本では夏鳥。  
日本に渡来するものは冬期にフィリピン、スラウェシに渡る。トカラ列島以南の南西諸島に渡来するのは別亜種リュウキュウアカシヨウベン。



# 火の鳥——アカシヨウビン

写真文 高円宮妃久子

今年の春は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策の「お家タイム」を実践するにあたり、赤坂御用地内の樹木や草花を、毎日、ゆっくりと眺めて過ごすことができました。例年、秋から初夏にかけては、鳥の撮影でいろいろなところに出向くのですが、もう1年以上、重いレンズと三脚を持って出かけておらず、筋力低下がいささか心配です。今回の主役は火の鳥の異名をもつアカシヨウビン——3年前に撮った写真をご覧にいられたと思います。

「緋色」は「火の色/日の色」を表しているそうです。森を飛ぶ姿はまさに火の玉。大きな頭に巨大な嘴、短い尾と特徴的なルックスで飛ぶ姿は目立つのですが、地面に降りると、体色の赤褐色が枯れ葉と同化して保護色になります。なお、アカシヨウビンは漢字で「赤翡翠」と書くため、大学生のころ、私は「赤ヒスイ」と勝手に解釈。赤と緑の鳥を想像しておりました。実は、「翡翠」は「カワセミ」とも読むことから「赤いカワセミ」という意味です。アカシヨウビンはカワセミ科の鳥ですので、当然なのですが、いまでもこの漢字を見るたびに、若いころに誤解していたことを思い出します。

最近、アカシヨウビンの声を聞くことも、姿を見ることも少なくなってきたといわれており、じっくり撮影したいと思いつながら、何年も経ってしまいました。3年前、鳥仲間の案内で、丸一日掛けて、テントの中から観察と撮影をすることが叶いました。お天気がよく、暗い森とのコントラストで、露出や絞りに戸惑うことも多かったのですが、充実した時間をアカシヨウビンと過ごすことができて嬉しかったです。

アカシヨウビンの「キョロロロ」と尻下がりになる囀りは、特徴的で、とても印象に残ります。繁殖期が梅雨時であるため、雨が降りそうなときに鳴くことが多く、「雨乞い鳥」とも呼ばれるようになったそうです。その目立つ姿とちよつと哀愁の漂う独特な鳴き声に、人々の想像力が膨らみ、いろいろな伝承が生まれたのでしょうか。天に向かって「水が欲しい」と鳴いているのは、「悪いことをした罰に水が飲めず、喉が渴いて雨乞いをしている」、あるいは「アカシヨウビンはカワセミが火事にあい、赤くなったもので、水が欲しいと鳴いている」などと言ひ伝えられています。

沖縄には別亜種リュウキュウアカシヨウビンが渡ってきました。本土のアカシヨウビンと生息環境が異なり、海岸近くの集落に営巣していることから、地元では身近な鳥のようです。もう20年ほど前になりますが、石垣島の宿の近くで鳴いていたので、宮様が口笛でキョロロロと真似をなされると、少しずつ近くに寄ってきて鳴いてくれました。別のオスがなわばりに入ってきたと思い、追い払おうとしているのです。宮様は「少し下手なので、姿を現すかも」とにっこり。3回ほど鳴き交わしをされました。上手すぎると、「若くて強いオスが来た!」と怖気づいてしまいましたが、自分と同じ、またはより弱い個体ならば、追い払えると思っているので問題がない、とのこと。懐かしい思い出です。

「火の鳥」といえば、多くの方はフェニックス、不死鳥を連想されるでしょう。寿命を迎えると、燃え上がる焚き火に自ら飛び込み、再び蘇ります。人類の歴史の中では、いくつもの文明が滅び、新たな文明が生まれており、ウイルスとの戦いの中でも、必ず復興を上げています。この度のコロナ禍においても、ワクチン接種が世界中で始まりました。必ず社会は生まれ変わり、復興を果たします。

火の鳥の姿を見た人は幸せになるといわれています。アカシヨウビンも火の鳥ですので、読者の皆さまは、どうぞ写真でその姿をじっくりとご覧くださいませ。少しでも幸せな気持ちになっていただけますよう、願っております。



姿、形はカワセミと似ているが、一回り大きく、ムクドリほどある。カワセミは周りが開けた河川に棲む水辺の鳥だが、アカシヨウビンは周りを林で囲まれた河川に棲む森の鳥。雌雄ほぼ同色。腰には水色の斑があり、飛ぶと目立つ。写真は羽繕いをしているところ。



リュウキュウアカシヨウビン 27.5cm カワセミ科  
宮様が撮影された写真。本土の亜種に比べ、上面の紫が強く、腰の淡青色の斑（写真では白く写っている部分）がより大きく目立つ。常緑広葉樹林、海岸林や村落周辺の林に生息。林の中だけでなく、海岸でも魚などを捕り、貝は石や鉄棒等にたたきつけて割って食べる。

夏期、日本各地に渡来し、平地の林から奥山に棲み、朽ち木、時にはスズメバチの古巣などにも自分で穴を掘って営巣する。キツキの古巣も利用。このブナの木の巣穴にいるヒナに、親鳥が盛んに餌を運んでいた。



暗い森の中でも飛ぶ姿は目立つ。餌の内容が多様で、溪流でイワナを捕らえるほか、セミ、サワガニ、カエル、トカゲ、時にはヘビをも捕らえる。この時には主に、カエルと昆虫類を運んでいた。

